峯、山尖高處也、小而高曰岑、大而高曰崧、山頂曰巔、

〔東雅地輿二〕古語に子といひしには、止るの義ありしかば、峯を子といひしは、其止る如く、動かざるの義なるべし、又高きを神にし、尊むでミ子といふ事、たとへば後世の俗、みつの御山、伊豆の御山などいふ如く、道をも始は、チといひしを、後にミチなどいふ事にもなりけり、

〔倭訓栞前編三十〕みね　倭名抄に、嶺、峯、岑をよめり、大根の義成べし、刀のみねも、峯の義成よし、古今著聞集に見えたり、俗にむねといへり、刀背也、異朝に山背を峯といひ、屋脊を棟といへる、其義同じ、倭名鈔に梁をよめり、鼻梁をはなみね、脊をせみねといふ類也、

〔類聚名物考地理十四〕ね　みね　嶺

富士のね、甲斐がねは、皆岑也、嶺は、ねに眞字をそへていふなり、み吉野のみ山、み熊野といふが如し、太山をみやまといふ、俗には深山とも書り、水の深き所を、みをといふ、山の高き所も尾上共いへるが如し、家の棟を屋根といふも同じ、根とて山の麓にはあらず、又岑をみの一言にいひし事、たま〳〵萬葉第三に見ゆ、

〔類聚名物考地理十五〕嶺　ね　嶽

不二のね、甲斐がね、筑波ねの類ひは、みねの略言なり、假字に根と書しによりて、心得違へて、山の裾の事と思ふは僻事なり、今俗に、富士の根方など、て、裾の山口のわたりを云はその意にて、木草の根は下に有り、枝葉は上に在るより、轉りて心得しものなり、みは眞と同じく、ほむる事にいふ詞なり、俗に家の上を、屋根と云ふにてしるべし、家棟なり、むねみね相通へり、劒太刀をもみねとも云ふなり、

〔類聚名物考地理十四〕山のたかね　山高嶺

山の高峯なり、甲斐がね、富士のねの如きは、みな峯なるを、猶山の中にも、谷有り、尾あり、岑あれば